

肝臓膿瘍ノ肺ニ穿孔セル一例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38296

明太魚	發育良 基面ニ變色ナシ	發育良第三日 ニ至リ少シク 基面赤變ス	A型ニ同シ	發育良 基面赤變ス	—	—
-----	----------------	---------------------------	-------	--------------	---	---

備考 一、田中氏成績ハ朝鮮醫學會雜誌第四號ニ掲載セラレタル豫報記事ニヨル
二、「—」ハ實施ヲ缺キシモノ或ハ記載ナキモノ

利害關係

(1) 利益

- イ、生牛肉ニ比シ朝鮮内到處ニ於テ得ラレ且ツ甚ダ廉價ナリ
- ロ、干物ナルヲ以テ貯藏ニ便ニシテ生肉ノ半ニテ猶ホ目的ヲ達シ得ベシ
- ハ、明太魚ハ原來脂肪ニ乏シキ故培養基汁製作ニ適ス

(2) 害

強テ害ヲ揚グレバ干物ナルヲ以テ直チニ煮沸スル時ハ充分其含有スル養素ヲ煎出シ得ザル可シト思考ス(普通培養基汁製法ノ略法ノ如ク)故ニ清水ニ浸漬シ充分潤ケル迄ニハ一晝夜ヲ可トトス從テ比較的長時間ヲ要スル不利アリ然レドモ至急ヲ要スル場合ニ在テハ普通生肉ノ二三時間煮沸ス可キヲ四五時間ニ延長セバ可ナラン(直接煮沸スル法ハ未ダ實施セズ)

結論

明太魚ハ朝鮮内何處ニ於テモ得ラレ且ツ甚ダシク廉價ナルト生肉ノ殆ント半ニテ能ク目的ヲ達シ得ルヲ以テ有利ナリト思考ス之レニ反シ生肉ハ避地ニ在テハ殆ント得ラレザルコト往々アリ
鰯肉汁ニ基ケル明太魚ノ研究ハ脂肪少ナキ廉價ナル加之其ノ地ニ於テ得易キ品ヲ以テ培養基ノ基汁ヲ製作セント企テタルモノニシテ必ズシモ無益ナ

ル業ニ非ル可シト思考ス

終ニ臨ミ里見、田中兩氏ニ敬意ヲ表シ本作業ヲ認可セラレタル岡本會衛成病院長殿ニ深謝ス

● 肝臟膿瘍ノ肺ニ穿孔セル一例

金澤病院佐々木内科 近藤清 吾(四三)

肝臟膿瘍ハサシテ稀有ナル疾病ニアラズ、然レドモ熱帶地方ニハ比較的多ク溫帶寒帶ニハ少ク本邦ニ於ケル報告モ臺灣ヨリスルモノ其大部分ヲ占ム隨ツテ吾人ハ日常肝膿瘍ニ遭遇スルコト比較稀ナリ、故ニ近者其肺ニ穿孔セル一例ヲ得タレバ敢テ此處ニ報告セントス、肝膿瘍ノ肺ニ破壊スルガ如キハ一見容易ナラザルガ如キモ文獻ニ徵スレバ其運命ヲ肺ニ終ハルモノ最モ多シ、余ハ余ノ症例ヲ揚グルニ先チ少シク一般の記載ヲナサン
肝臟膿瘍ノ原因
肝臟部ノ外傷ニヨリテ生ズルコトアルモノヲ除外セバ吾人ハ其感染經路ヲ大約二ツニ區別シ得ベシ、即チ血道ヨリスルモノト膽道ヨリスルモノト是ナリ其他接觸蔓延及ビ所謂特發性ヲ區別スベシ

A. 血道性ニ起炎物ノ血道ニヨリ肝臓ニ侵入スルモノ

(1) 門脈ニヨルモノニ殊ニ腸ノ潰瘍性疾患其他門脈分布區域ノ炎症

(2) 肝動脈ニヨルモノニ始メ靜脈ニヨリ肺及心臟ヲ通過シテ肝動脈ニ

達スルモノニシテ全身膿毒症ノ一分症ト見做スベキモノナリ、例ヘ

バ心臟内膜炎、肺癰疽、腐敗性氣管枝加答兒ノ如キ之ナリ

(3) 肝靜脈ニヨルモノニ之レ稀有ニシテ所謂逆行性栓子ニヨリテ起炎

物ノ肝靜脈ヨリ肝臓ニ達スルモノヲ云フ

B. 膽道性ニ膽道ヨリ肝臓ニ達スル起炎物ハ常ニ腸ヨリ來ルモノナリ、

而シテ此場合ニハ殆ド常ニ膽道炎ヲ前驅ス、此種類ノ肝膿瘍ノ最も多

キ原因ハ膽石ノ形成ナリ、蛔虫ノ迷入ニヨリテ肝膿瘍ヲ生ズルコトア

リ此際勿論化膿菌ヲ隨伴スルヤ必セリ

C. 接觸性蔓延ニ胃潰瘍及胃癌ノ如キ近隣臟器ヨリ接觸性蔓延ニヨリテ

肝膿瘍ヲ起スモノヲ云フ

D. 特發性ニ歐洲及日本内地ニ於テハ稀ナルモ熱帶地方ニ於テハ稍屢々

外觀的原因不明ノ所謂原發的膿瘍ヲ實驗スルコトアリ (primärer

Leberabscess oder spontaner Leberabscess)

發炎体

一般ニ肝膿瘍ノ原因トナルモノハ普通ノ化膿菌ナリ、然モ亦他ノ細菌例ヘ

バ普通大腸菌ノ如キモ之ガ原因タルコトアリ、赤痢後ニ生ゼル肝膿瘍ニハ

『赤痢アメーバ』モ大ナル關係アルガ如ク少クトモ肝膿瘍中發見セラル、然

レニケルニセ、パスカール氏等ニヨルバ此際ニハ『アメーバ』ノ他ニ化膿菌

ヲ隨伴スト云フ、結核菌、「パラチープス菌」ニヨリテ肝膿瘍ヲ生ゼル例ヲ

報告セルモノアリ、臺灣ノ長野純藏博士ハ報告シテ曰ク膿中或ハ球菌ヲ有

シ又稀ニ桿菌ヲ見ルコトアリ、又全ク無菌ナルコト甚ダ多シ『アメーバ』

ヲ膿中ニ見ルコトハ割合ニ少シト(明治四十三年外科學會雜誌十一ノ一)

肝膿瘍ノ運命

小膿瘍ハ往々吸收セラレント自然活癒ヲナスコトアリ、然レハ之レ稀有ノコ

トニ屬ス、手術ニヨリテ治スルコト多キハ統計ニヨリテ明カナルコトナリ、

然レハ其多クハ穿孔スルモノナリ、統計ニヨルバ穿孔ノ部位ハ肺臓ニスル

モノ最も多ク比較的他ノ部ノ穿孔ニ比シテ豫後佳良ナルガ如シ

マンソン氏統計 百五十九例ニ於テ

心囊ニ穿孔セルモノ 一

肋膜腔 三一

肺臓 五九

腹腔 三九

腸管 六

胃十二指腸 八

膽管内 四

腎臓内 二

下大靜脈 三

鼠蹊部 六

シユルゲンセン氏ニヨルバ

胃心包右腎ニ穿孔セルモノ 四%

右側胸腔 一五%

腹腔 一九%

腸管 一九%

氣管枝 四三%

ナリ、日本ニ於テハ肝膿瘍ノ報告多數ナルモ未ダ斯クノ如キ統計ナキガ如シ、余ハ醫事索引ニヨリ日本ニ於ケル明治二十八年ヨリ明治四十四年ニ至ル間ニ肝膿瘍ノ報告者五十九、病例約百三十症例ヲ得タリ(尙遺洩アルベシ)其内余ガ一讀ヲ得タルモノ總數百例アリ、百症例中穿孔セルモノ二十例ヲ得試ミニ左ニ統計ヲ作レリ

症例總數 百

穿孔總數 二十(總數ノ20%)

肺穿孔 11 55%

腸穿孔 5 25%

腹腔穿孔 2 10%

肋膜腔穿孔 2 10%

之ニヨリテ見ルモ肺ニ穿孔スルコト最モ多キヲ知り得ベシ、肺穿孔十一例中五例ハ全治セリ

症候及診斷の要徴

肝臟部ノ激痛又鈍痛、肝臟腫大、肝臟部ノ膨隆、時トシテ波動、弛張熱、右肩胛部ノ緊張又疼痛、屢ク咳嗽吃逆、等ハ學者ノ所見一致スル所ナリ

豫後

手術セザル肝膿瘍ノ豫後ハ多クハ不長ナリ

カストロ氏ノ統計ニヨレバ

非手術死亡 七六%

手術死亡 四八%

余ガ蒐集セシ百例ヲ以テ統計ヲ舉ケレバ

手術總數七十五 (治癒 二十八例 三七% 死亡 四十七例 六三%)

非手術總數二十五 (治癒 五例 二〇% 死亡 二十例 八〇%)

非手術ニシテ治癒セル五例ハ共ニ肺ニ穿孔セルモノナリキ

左ニ余ガ症例ヲ略記セン

患者 K F 四十八歳 官吏

初診 大正二年三月二十一日 入院同日

現病歴 本年一月七日感冒ノ感アリ、發熱三十九度(惡寒戰慄ナシ)全身

違和、右肩胛部及頸部ニ中等度ノ索引性疼痛アリ、其後熱ハ稍下降スルモ

弛張ス、然ルニ同月十七日突然惡寒戰慄ヲ以テ三十九度以上ノ高熱ヲ發シ

發汗甚ダシク翌朝三十七度五分ニ下降ス、但シ爾後熱ノ出沒弛張甚ダシ、

發病來輕度ノ咳嗽アリ同月二十日頃ヨリ前記ノ症狀ニ加フルニ右季肋部ノ

疼痛、壓痛輕度ノ腫脹アリ、爾來羸瘦脱力倦怠甚ダシ、以テ診ヲ乞フ、黃

疸、嘔吐、劇痛等ナシ、食慾不振、便通不定、尿利一日五六回

既往病歴 生來健全、一昨年脱肛ノ手術ヲ受ケタル外著患ナシ、花柳病、

傳染病等ナシ寄生虫時々蛔虫、嗜好品時々飲酒二三合、煙草ヲ好ム

現症 体格中等、營養不長、皮膚蒼黃、眼球結膜微ニ黃色、胸部ニ左肺

一般呼吸音粗裂右肺呼吸音微弱、打診上右胸、正中線ニテ第四肋骨以下、

乳線ニテ第四肋間以下、中腋下線ニテ第六肋間、肩胛線ニテ第八肋間以下純濁、此部呼吸音及聲音振顫消失ス、腹部一般輕度ノ膨滿鼓腸、殊ニ右肋骨弓下小兒頭大一見膨隆シ觸壓スルニ輕度ノ壓痛アリ、一般ニ緊滿、硬度中等以上、表面滑澤、其邊緣ハ肝臟形ヲナシ甚ダ鈍緣ニ終ハル、下界ハ正中線ニ於テ劍狀突起下十一cm副胸骨線ニ於テ肋骨弓下十cm乳線ニテ弓下八cmナリ、脱肛手術部ニ變化ナシ、其他ニ著變ナシ、尿、糞便ニ大ナル變化ナシ初診時肋膜腔及ヒ肝臟部數ヶ所ニ試験的穿刺ヲ試ミタルニ穿刺液ヲ得ズ、但シ其他ノ所見ニヨリ右下胸ノ濁音ハ主トシテ肝臟濁音ナリトシ肝膿痛ノ診斷ヲ下セリ

經過

自三月二十一日至四月十一日 此二十二日間初診時ト自覺症他覺症ニ著變ナシ、但シ漸次増悪ノ傾向、主訴ハ右肩胛部及頸部ノ索引様疼痛、熱三六、二一三八、七強張、脈膊八〇—一二〇、食餌重湯ニ合粥四梳卵三個魚肉ソップ小許、種々ノ對症的療法ヲ試ムルモ著シキ結果ナシ

四月十二日 早朝俄然、咳嗽頻發シテ混血膿汁様物ヲ咯出スルコト多量、直ニ之ヲ診スルニ肝臟濁音部ハ膿汁様物咯出後第一肋間下降即チ第五肋間トナリ聽診上右胸下葉多數ノ粗大ノ濕性ラツセル。上葉ニモ少數、左胸骨面下葉ニ少數ノ濕性ラツセルアリ咯血ト同時ニ肝臟稍柔軟トナル、肺ノ打診音大差ナシ自覺症ハ咳嗽ニ苦ムモ其他ハ却ツテ長ク肝臟部ノ緊張右肩胛部ノ索引様疼痛等共ニ稍輕快セリ、咯出物ハ一見混血膿様ニシテ汚暗赤灰白ニシテ惡臭ナク之ヲ鏡檢スルニ赤血、球膿、球無數、其他ノ所見ナシ、細菌學的検査ヲ行フニ結核菌陰性、培養シテ黃色葡萄狀菌ノ殆純粹ナルモ

ノヲ得タリ(細菌學的検査ハ同僚松村喜一氏ニヨル)咯出物日量約四百瓦、熱三六、五一三八、六。脈百十

自四月十三日至十五日 肝臟部益柔軟縮小シ全右胸粗大ノ濕性ラツセル無數、打診音著變ナシ、咯出物大約三—四百瓦、咯出物僅小ナル日ハ肝臟部緊張抵抗增加、熱三六、四—三八、〇。脈九五—百二五

四月十六日 咳嗽激甚、咯出物停止セズ依然日量四百瓦、漸次全身ノ衰弱加ハル、他格的ニ右胸一般輕濁、氣管枝音、濕性ラツセル減少、細菌培養ニヨリ初回ト同様ニ黃色葡萄狀菌ヲ得タリ、熱三六、八一三七、七。脈九八一—百十五

自四月十七日至五月一日 自覺症著變ナシ、他格的ニ右胸一般純濁、氣管枝性、濕性ラツセル益々減少、肺炎ヲ併發セルモノト認ム、咯出物二五〇—四〇〇瓦、熱三五、八一三八、七。脈八十一—百二十五

五月二日 諸症依然、漸次衰弱、肋膜腔及肝臟部ノ試験穿刺陰性(但シ肝臟部ノ穿刺ハ一ヶ所)咯出物大差ナシ、熱三六、五一三六、九。脈八〇—九〇

自五月三日至十三日 自覺症他格症咯出物大差ナク体温一般ニ下降スルモ全身狀態益々噸惡、熱三五、九—三七、九。脈九〇—一一〇時々結代ス

五月四日 遂ニ衰弱ノ爲メニ斃ル

以上余ノ症例ニ於テハ其起炎物ハ恐クハ黃色葡萄狀菌ニヨルモノナランモ其感染経路ハ不明ナリ、只疑ハシキハ脱肛ノ手術ナルモ此部ニ初診時何等ノ變化ヲモ認メザリキ、此處ニ起レル症候ハ一般ノ記載ト殆ト合致スルノ觀アリ、而シテ其運命ヲ最モ穿孔ノ多キ肺ニ終ハレルモノトス